新编日本史

刘建强　编著
周维宏　审订

外语教学与研究出版社

新编日本史

刘建强　编著
周维宏　审订

外语教学与研究出版社

(京)新登字 155 号

图书在版编目(CIP)数据

新编日本史/刘建强编著. -北京:外语教学与研究出版社, 2002

ISBN 7-5600-2949-3

Ⅰ.新… Ⅱ.刘… Ⅲ.日本-历史-日文 Ⅳ.K313.0

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2002)第 053842 号

新编日本史

编著: 刘建强

审订: 周维宏

* * *

责任编辑: 薛 豹 钟 诚

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: http: //www.fltrp.com.cn

印 刷: 北京师范大学印刷厂

开 本: 850×1168 1/32

印 张: 10.125

版 次: 2002 年 9 月第 1 版 2002 年 9 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 7-5600-2949-3/H·1529

定 价: 13.90 元

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励 (010)68917826

版权保护办公室举报电话: (010)68917519

出版说明

为了满足新时代高等院校日语专业日本概况课教学的要求，使日语专业高年级学生及社会上广大的日语爱好者更加深入地学习到正确的关于日本历史的知识，我社最新推出了西安外国语学院刘建强先生编著的《新编日本史》一书。

为了进一步保证历史知识的准确性和历史观点的正确性，使本书臻于完善，我社特聘请北京日本学研究中心教授、中国日本史学会副会长、中华日本学会理事周维宏博士对本书进行了全面的审订。在此谨对周维宏教授为本书的出版付出的辛勤劳动表示衷心的感谢！

为了方便读者使用，我们特意请作者给本书中出现的绝大部分人名、地名以及其他难读词都标注了读音假名。另外，书末还有非常实用的附录。希望本书的问世能给中国的日语教学助一臂之力，也希望广大读者喜欢这本教科书。

外研社日语部

2002 年 7 月 15 日

前　言

笔者在日本留学时学习的是日本史专业，回国后一直在外语院校给日语专业的学生讲授日本历史课程。实际授课时首先感到难为的是没有很合适的教材。无奈之下，决心自己动手编写，几年下来手头竟然有了一套基本成型的日文日本历史教材。使用自己认为合适的教材授课，自然感觉不错。欣喜之余，又冒出何不将此整理出书以飨日语读者的念头。经过努力，此书将由外研社出版与读者见面，感到欣慰的同时，也向外研社表示谢意。

在外语院校里，日文的日本历史书并不少，但是却很难从中选出给中国的日语专业学生授课用的合适的教材。所谓的不合适表现在诸多方面，最根本的是因为这些书基本上都是日本学者以日本人为对象编写的，所以其视角及内容的构成和表述上都不可避免地带有不少日本人特定的色彩。给中国的学生讲授日本的历史，使用这样的教材显然不太合适。笔者最初决定编写一本适合于中国的日语专业人员阅读的日文日本历史书时的想法主要缘自于此。在编写本书的过程中，笔者按照最初构想，始终遵循了以中国人的立场和视角来审视和叙述日本历史的原则，把历史上的政治变革作为叙述时代变迁的主线，对日本各个时代的社会、经济、文化状况以及对外交往都做了较为全面的介绍。这一编写原则和方式的目的，就是希望读者在阅读此书后能够对历史上日本的全貌有一个准确的了解。

本书是用日语编写的，可供大学日语专业三年级以上学生学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

习阅读用。日语专业的研究生及其他日语专业人士也可以把此书作为了解和研究日本的基础读物。略懂日语的人一般都知道，中国人阅读日语书籍时常常感到头疼的是日语汉字的读音。若不能正确读出日语中某个汉字或汉语词汇的发音就无法查阅词典弄懂该词的意思，那么对书本内容的进一步理解就成为一句空话。本书作为日本历史的读物，其词汇及用语中具有历史特定读音及意义的为数不少，这些很有可能成为日语专业读者阅读本书过程中不断出现的绊脚石。为了让喜欢此书的读者能够阅读得顺畅，并且能够从这种顺畅中享受到读书的快乐，笔者除了在文章中适当的加注了“振假名”之外，还在本书的最后专门设置了“人名的读音”、“天皇名的读音”、“难读词汇的读音”这一附录。而其中“难读词汇”的选录标准基本上是在常用的日汉、汉和词典中不易查找到的汉字词汇。

阅读此书时需要使用的工具书，除了一般的日本语词典、汉和词典外，最好还应该备有日文版的日本史词典。如果能有日本历史的资料图表、年表作为学习阅读时的辅助材料那就更为理想了。

本书在编写完成后，得到了在笔者供职的大学任教的日籍教师铃木芳明先生（日本国东京都立大学日语专业博士生）在日语表述方面的精心修改和润色。在此谨向铃木芳明先生表示诚挚的感谢。

本书的内容中可能存在一些不足、乃至谬误之处，若能得到学者及读者们的批评和指正，笔者不胜感激。

刘 建 强

2001 年仲秋　于西安外国语学院

目　次

第一編　原始・古代……1
第１章　日本文化の黎明……1
1　文化の始まり……1
2　縄文文化……2
第２章　古代国家の形成と東アジア……4
1　弥生文化……4
2　国家の成立……7
3　大和朝廷と古墳文化……10
第３章　古代国家と文化の発展……15
1　推古朝政治と飛鳥文化……15
2　律令国家の成立と白鳳文化……18
3　律令国家の発展……23
4　天平文化……28
5　平安初期の政治と文化……30
第４章　貴族の政治と文化……34
1　摂関政治と荘園制……34
2　国風文化……39
3　院政と平安末期の文化……42

第二編　中　世（封建前期）……47

第５章　武家社会の形成とその文化……47
1　武家政治の成立……47
2　武家支配の形態……53
3　幕府の衰退……59
4　鎌倉文化……65
第６章　武家社会の成長と文化の普及……70
1　南北朝の動乱……70
2　室町幕府の成立……74
3　幕府の衰退と庶民の台頭……78
4　戦国大名の成長……83
5　室町文化……87

第三編　近　世（封建後期）……92
第７章　後期封建社会の確立と文化の発展……92
1　ヨーロッパ人の来航と信長・秀吉の統一事業……92
2　織豊政権と桃山文化……97
3　幕藩体制の確立と寛永文化……103
4　江戸初期の外交と鎖国……113
5　幕藩体制の展開……120
6　元禄文化……126
第８章　封建社会の動揺と文化の成熟……130
1　幕政改革と諸藩の動向……130
2　幕政の衰退……136
3　化政文化……140
4　近代への胎動……148

第四編　近代・現代……154
第９章　近代国家の成立と近代文化の発達……154
1　開国と幕府の滅亡……154
2　明治維新と富国強兵……159
3　近代国家の形成と対外的拡張……166
4　資本主義の発達と列強の仲間入り……175
5　近代文化の発達……182
第１０章　近代日本とアジア……194
1　第一次世界大戦と日本……194
2　ワシントン体制と政党政治……199
3　日本帝国主義の対外膨張……209
4　第二次世界大戦と日本……215
5　両大戦間の日本の文化……224
第１１章　戦後昭和期の日本……231
1　占領下の改革……231
2　国際社会への復帰……237
3　日米関係の新展開と経済大国への道……242
4　国際情勢と日本……247
5　現代の文化……252
終章　昭和から平成へ……258
〈付録〉
日本史略年表……263
人物名の読み方……274
天皇名の読み方……295
難読語の読み方……301

第一編　原始・古代

第1章 日本文化の黎明

1　文化の始まり　―日本列島の形成と先土器文化―

日本の歴史が繰り広げられる舞台となる日本列島の大地は、地質学でいう中生代（約2億年前）のころ、初めて海の中から大陸の一部として、その姿を現し、新生代の第3紀（約2500万年前）に大規模な海侵が発生したため、日本海が生まれ、弧状列島の原形が作られた。その後列島は隆起し続け、第4紀の氷河時代（洪積世の中期、約70万年前）に日本列島は次第に大陸を離れていき、いまから約1万年前の沖積世の初頭、大陸と完全に分離して、今日の島国が形成された。

洪積世にまだ大陸と陸続きだった日本列島には、陸橋を渡って、大形動物が自由に行き来していて、これらの動物の群を追って、人間集団は大陸から移動してきて住み着いたと考えられる。しかし洪積世の化石人骨として、日本では戦前1931（昭和六）年早稲田大学の直良信夫氏が兵庫県明石市西八木海岸の崩土から洪積世人類の腰骨らしいものを見つけたものの、化石そのものが太平洋戦争中失われてしまい、しかも石器などの遺物を伴っていないところから、洪積世の日本には人類が生息して

いたかどうかについては、否定的な見方が強かった。ようやく戦後1946年民間人で考古学に関心を持つ青年、相沢忠洋さんが群馬県桐生市近郊の岩宿の洪積世後期の関東ローム層から、打製石器の破片を発見し、1949年再調査の結果その発見が認められたのをきっかけに戦前の否定的な見方は覆された。その後洪積世の遺跡は日本各地で1000ヵ所以上発見され、確実なものだけでも100ヵ所以上に及び、化石人骨も、最近までに愛知県牛川・静岡県三ヶ日・大分県聖岳などで発見されている。ところが、この時期の文化はまだ土器を制作・使用していないので、先土器または無土器文化と呼ばれる。先土器文化はふつう旧石器文化であると見られているが、これについては異論もあって、今のところ岩宿遺跡などの文化はだいたい今から1～3万年前の後期旧石器文化であろうという見方が有力である。

2 縄文文化 ―文化の発展とその時代―

今から約1万年ぐらい前に氷河時代が過ぎ去って沖積世の時代になると、地球の気候は温暖となり、氷河が融けて海面が上昇してきた。また地殻の変動もあって日本列島は大陸から完全に離れてほぼ今日の姿になった。暖流と寒流の循環によって日本列島は海洋性の気候となり、季節風が四季おりおりの変化をもたらす、といった自然条件の変化につれて、列島の植物や動物など自然界の産物もそれに適応するように変わっていった。樹木が繁茂するようになり、大形動物が絶滅し森の中には猪・鹿・穴熊・兎などの中小動物や鳥類が増えてきた。こうした自然環境やその産物の変化に伴い、人間の生活手段や様式

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、基本的には先土器時代と同様、狩猟・漁労・採集の段階にとどまっていたが、技術的にはかなり進歩した。たとえば弓矢が考え出され、石器も磨製石器が作られ、使われ始めた。とくにこの時代の進歩を示すものとして、食物の煮炊きや容器に使われるための土器の制作が始まり、その形や文様が各地でさまざまに発達したことがあげられる。この土器はだいたい表面に縄目や莚の文様が付けられているので、縄文（式）土器と呼ばれ、この時代を縄文時代と呼ぶ。

磨製石器と土器を持つこの時代の文化は、縄文文化と名づけられ、新石器文化に属し、その遺跡は日本の各地に発見されている。縄文文化を創り出した人間はまぎれもなく日本人の祖型と認められるが、日本民族の形成については見方がいくつもあり、そのうち混血説が比較的有力である。すなわち一般的にいって日本人の先祖がこの列島に住み着いたのち、絶えず、渡来した南北両系統の人々と混血を重ね、また生活環境の変化に伴って体質的な変化も進んでいき、こうして周辺諸民族とはちがった特徴を持つ日本民族が形成されたと見られる。

この時代には、人々はたいてい食料の入手に便利な海岸や河川もしくは森林の付近に竪穴住居の集落を形成して生活を営んでいた。多くの集落には中央広場があって、これは共同作業や祭りの場であったらしい。また海岸近くの集落では、人が捕食し捨てた貝殻や獣の骨などが堆積した貝塚が規則正しく環状または馬蹄形に分布しているところもある。ところが、生産力が低く、食料などの獲得が自然条件に左右されることが多く、他の集落やかなり遠隔の地との間に交易も行われたが、人々の

暮らしは不安定で厳しい模様であった。人々は集団で働き、収穫物は公平に分かち合ったため、個人的な富や権力の発生を生み出すような余剰生産物の蓄積が不可能であった。集団生活の秩序は、経験豊かな長老が取り仕切ったようで、いわば集団の統率者が現れたが、貧富の差や階級の区別はなかったことから、無階級の社会であったと考えられる。この原始社会の人々は、つねに自然の脅威に直面したので自然や自然現象に精霊の存在を認めるいわゆるアニミズム（animism）を信仰し、呪術によって災いを防いだり豊作を祈ったりする風習があった。女性をかたどった土偶の大量存在などがその現れであろう。死者の埋葬は死霊の復活による穢れを避けようとするため屈葬の方法が一般的で、また集団の統制が厳しいものとされ、人が大人になったことを意味する成人通過儀式の一つとして、抜歯が強制的に行われた。縄文時代の晩期には食糧資源の不足に悩み、人口の増加や生活文化の発達は、しだいに停滞した模様であった。

第2章　古代国家の形成と東アジア

1　弥生文化　―農耕の発生と社会の変化―

紀元前3世紀頃、九州北部に新しい文化が起こり、そして急速に東へ広がっていった。そのため日本列島社会には、それまで長期にわたってつづいた狩猟・漁労・採集の生活中心の時代から農耕社会への移行が始まった。

そのころの中国大陸では農耕文化が相当発展しており、金属器の使用も盛んであった。戦国時代の混乱を収拾し、中国の統一を達成した秦とそれに続く漢は、国の版図をかつてないほど拡大し、西は中央アジアから東は朝鮮半島北部までをその支配下におさめた。同時にその進んだ文化は周辺諸地域に波及しはじめ、やがて中国大陸の南部や朝鮮を通して日本列島に伝わった。

こうした大陸の農耕文化の影響を受けて、九州北部を中心に生まれた新しい文化は、水稲農業と金属器の使用を特徴としており、これまでの縄文（式）土器に替わって、弥生（式）土器と呼ばれる薄手で赤褐色の土器が使用されたところから、弥生文化と呼ばれたもので、紀元3世紀頃まで続いた。弥生（式）土器は1884（明治十七）年に東京本郷の弥生町（現在の文京区弥生2丁目）の貝塚から壷形の土器が初めて出土されたので，その地名をとって名付けられた。弥生（式）土器には甕・甑・壷・高坏などがあり、その形は用途に応じて分化していった。弥生文化には大陸から伝わってきた要素と、縄文文化から伝統として受け継いだ要素とが見られるが、大陸伝来の要素として中国に起源を持つものと、朝鮮半島の南部系統を引くと思われるものがある。

金属器の使用は、中国大陸からの鉄器と青銅器の伝来に始まった。鉄器として斧や小刀のような鉄製工具と、鍬・鎌などの農耕具や鋸・釣り針などの漁具、それに鉄鏃・鉄剣といった武器などが使われ、弥生時代中期以後、鉄素材を受け入れ、日本国内でも鉄製品の加工が始まったらしい。鉄器にやや遅れて青

銅器が弥生前期の末ごろに伝えられたらしく、銅剣・銅鉾・銅戈などの利器と、銅鐸・銅鏡などが大量に出土され、ほかに銅製の農耕具や針・釣り針・腕輪なども見つかっている。鉄器と同じように青銅器も大陸からの舶載品のほか日本国内製造のものがある。金属器の用途として、鉄器が実用的な用具・農具・武器であったのに対し、青銅器はほとんど非実用的な宝器・祭祀器具であったという特徴がある。また青銅器の出土分布から、弥生時代には北九州を中心とした西日本の銅剣銅鉾文化圏と、近畿を中心とした中部から中国・四国地方までを含む地域の銅鐸文化圏という二つの文化圏が存在していたことが認められている。

九州北部に端を発した水稲農業は100年と経たないうちに、西日本一帯、伊勢湾沿岸、関東地方、東北地方へと進み、ほぼ日本全土に拡大していった。福岡県板付遺跡や奈良県の唐古遺跡はこの時代の前期または前期から後期にかけての農業集落遺跡であり、静岡県の登呂遺跡は後期の農業集落遺跡として代表的なものである。こうした農業の発達とそれに伴う鉄器の普及は社会全体に大きな変化をもたらした。まず生産力の向上に伴って農産物の蓄積が可能になり、そこで集落には貧富の差や身分の別が生じ、支配階級と被支配階級という階級分化の現象が現れた。また大規模な治水や灌漑などではいくつかの集落の協力による共同作業も行われ、一つの水系を単位とした地域を統率する首長が出現した。こうして生まれた地域集団の間には土地や水系などの利益をめぐって争奪や併合が繰り返され、そしていくつかの地域集団を統合したさらに有力な集団の首長が現れ、

その地域の支配者としての性格を強めていった。こうした動きはやがて日本各地に集団の連合体（小国）を作り上げていったと考えられ、その意味で弥生時代は原始から古代への転換期であったといえるのであろう。

2　国家の成立　―小国の分立と邪馬台国―

日本の国家発生に関しては、文字の使用がずいぶん後のことであるためか，日本にはその確かなる文献的記録がいまだ見つからない。現存の最古の史書である『古事記』や『日本書紀』には4世紀後半と見られる応神天皇以前についての記述はあるが、しかし神話のベールに包まれて、史実としての信憑性がきわめて低い。ところが弥生時代の日本の状況は、中国の史書から伺うことができる。紀元前1世紀ごろに撰述された『漢書』の「地理志」は不十分ながらも紀元前2～1世紀の日本の事情を伝えている。「夫れ楽浪海中に倭人有り。分かれて百余国を為す。歳時を以て来り献見すといふ」という記事によれば、紀元前1世紀頃日本には100以上の小国が分立しており、定期的に貢物をもって楽浪郡に出かけていたことが分かる。また『後漢書』の「東夷伝」には「建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。（中略）光武、賜ふに印綬を以てす。安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願ふ。桓霊の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐して歴年主なし」と記されており、この奴国は「日本書紀」などに、儺の県とあるところで、現在の博多付近にあった小国と推定される。この記事からは、紀元57年には倭の奴国が後漢の都洛陽に使者を送って、

光武帝から金印を授かったこと、紀元107年には、倭の国王帥升が160人もの奴隷を後漢の安帝に献上したこと、さらに2世紀後半になって倭国が大いに乱れて、たがいに相争ったことがうかがわれる。

これらの中国史書の記録では、おそらく九州北部方面の状況が語られているものと思われる。だいたい紀元1〜2世紀ごろ、多くの小国が分立する状態で、しかも中国と交渉を行い、2世紀後半になると、これら小国の間に力の均衡が破れて争乱が起こり、この争乱を通じて、しだいに地域的な統一国家が形成されたという模様であった。九州北部に、このように小国の分立・相争い・連合統一の動きが続けられた理由の一つは、漢の勢力の影響が遠く日本の社会や文化に波及し、それに刺激を与えたものと思われる。実際考古学の成果として九州北部にある弥生中期の共同墓地からは、中国製の銅鏡・銅剣・銅鐸など数多くの副葬品が出土しており、特権的な首長が出現したことを物語っている。史書『後漢書』や金印にみられるいわゆる小国の「王」はこのような首長を指すものと考えられる。

小国分立時期の日本国産の青銅の祭器の分布には、九州北部を中心とする地域は銅剣・銅鐸と銅戈、畿内は銅鐸、瀬戸内海周辺の地域は平形銅剣というように、地域によりその種類が幾分異なるという特徴がある。そこでこれらの地域は当時の日本において、生産力が高く文化的にも進んでいて、畿内と九州北部の両勢力を中核として祭祀の形態を同じくする小国の連合（国家）が作られたと見るのが、学説の主流である。

3世紀初めの中国大陸では、後漢が滅びたのち、魏・呉・蜀の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com